

## 第2回 富山市スマートシティ推進ビジョン検討有識者会議 会議録

日時：令和4年2月18日（金）午後1時30分～午後3時15分

場所：オンライン会議（富山市役所 8階 802会議室）

出席者

【富山市スマートシティ推進ビジョン検討有識者会議委員】

森本委員（座長）、金山委員、小泉委員、下山委員、土肥委員、富成委員、東出委員、前田委員、安平委員 ※欠席：下村委員

【富山市】

市長、政策監、交通政策監、企画管理部長、企画管理部次長、情報企画監、情報統計課長、未来戦略室長

議事内容：事務局より資料説明を行ったのち、論点を中心に意見交換を行った。

森本座長）次第の委員名簿に沿って順次ご発言いただきたい。最初は金山委員からお願いしたい。

金山委員）今回の論点にあったデータの利活用という件については、データを蓄積することには2つのアプローチがあると考えている。一つは、5年後、10年後といったバックキャストを想定しながら、あるべき姿をもとに必要なデータを整理し収集・蓄積していく方法である。また一つは、自治体の色々なデータ・既存情報を民間に出せるものはオープンにしていき、データの活用を行いながらデータ整理・蓄積・収集を行う方法である。この2つを考えると、技術革新や社会変化といった課題解決には、検討・実装・評価等のPDCAを、時間をかけながら行う方法と、アジャイル（注：素早い実施・改善）でやっていく方法もある。テーマに合わせて、この二つを活用する必要がある。

技術革新については日進月歩のため、レベルの高い色々なデジタル人材とどう付き合っていくか、そしてネットワークや仕組みを作ることが大事であると考えている。また、デジタル人材育成については富山大学でも取り組んでおり、大学生と先生と企業との共同研究が図れるような取組に来年度も数社手を挙げていただいている。この取組の有益性は、単なる学生の卒論発表に留まらず同じデータを見ながら、学生にとっては普段聞きなれない、サービス内容や課題の解決方法、利益の出し方などの企業からの指摘が得られることだ。逆に学生から出たノウハウを企業が、持ち帰ったり、参加企業のデジタル人材育成にも活用していただいている。人材の底上げはコツコツとやっていくしかないと考えている。

森本座長）ありがとうございます。極めて重要な視点を最初にご提示いただいたと考えている。次に小泉委員からお願いしたい。

小泉委員）まず中間報告については、非常によく纏めていただいているという所感を持っている。ただ、これは一応10年後を想定したビジョンとなっているが、10年間固

定されて同じビジョンということでもないように思う。そのビジョンを実現するプロセスや、その過程を評価して見直すようなプロセスを、ビジョンの中に組み込んでおくことが必要だと考える。

それから、2点質問ということでお聞きしたい。私もスマート化には民間事業者の参加・協力が必須だと思っており、その中で行政は産官学のプラットフォームづくりが重要な役割として明記されているが、プラットフォームづくりに向け次年度以降どのように考えているのかをお聞かせいただきたい。また、ある程度地域を想定した、目指すべき生活像がスマートシティのコンセプトとして5章で書かれているが、そこにたどり着くためのプロセスや仕組みづくりについては、より具体的なイメージを作り上げるところまで共有してほしい。単なる計画書という形に留まらず、例えば産官学民のネットワーク作りに役立てたり、関心がある市民を生み出したり育て上げる効果など、取組の可能性について教えていただきたい。

森本座長) ありがとうございます。質問ということで、事務局からコメントをいただきたい。

事務局 ) ありがとうございます。小泉委員から、二つほどご質問いただいたと思っております。一つ目はプラットフォームづくりが、行政の役割として考えられるということだが、この後の二つ目の質問にいたしましても、今後さらに検討していかなければならないと思っている。現時点で富山市では、スマートシティに関するコンソーシアムのようなものが複数立ち上がっている。本来であればこういったものをうまく機能させることによって、産学官民、それぞれが役割を果たしながら具体的なサービスの取り組みにつなげていくことが理想的であると思っており、このビジョンに沿った形で今後再編することができないかということも考えている。二つ目の、単に計画づくりのための検討だけではなくて、何か今後の産官学民の連携に繋がるような取り組みを進めていけないかというご意見について、現時点では、富山駅前にスケッチラボという、市民の方々や多様な主体が参画して、新しい技術開発や地域課題の解決のような内容を話し合う共創拠点施設を整備している。こちらに参加されている方々は非常に多様なバックグラウンドをお持ちで、そういった方々が、この場でお互いの立場を超えて対話を重ねながら、課題解決し新しい価値を創出するようなことに取り組んでいる。ここではスマートシティの推進というものもテーマに挙げているので、こういった仕組みを活用しながら、少しずつ計画の策定とあわせて、具体的な取り組みも進めていければと考えている。もちろん行政の施策としても、すでに来年度予算で考えておきまして、個別具体のスマートシティの取組を、今後進めていくこととしている。そういった中でも多様な主体との連携というものを意識しながら、進めていけたらと考えている。

森本座長) ありがとうございます。多分関連する意見も出てくるかと思しますので、他の委員の方にも一通り伺いながら、議論を進めていきたいと思っております。次は下山委員からお願いしたい。

下山委員) 私から3点伝えたい。

①EBPM（注：証拠に基づく政策立案）を進めるには最初から完璧を求めないことが重要である。確かなエビデンス（証拠）が得られるまで何も進まないのはまずいという懸念がある。そうした意味では金山委員からのアジャイルという考え方は重要だ。最初はデータ不足が予想されるが、データが取れてから進めるという考え方ではなく、まずは得られるデータから判断して政策を立て、実証しながら新たなデータを取って精度を上げ改善や軌道修正をしていく必要がある。政府の方でも政策プロセスにアジャイルの考え方が必要であると謳われている。今年1月の行政改革推進会議でも「アジャイル型政策形成・評価の在り方に関するワーキンググループ」

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/gskaigi/dai47/gijisidai.html>）が立ち上がっていて、政策立案も政策プロセスもウォーターフォール型（注：最初に計画した通りに実行する方法）ではいろいろな変化に太刀打ちできないため、どうすればアジャイル型で進められるかを検討している。根拠に基づいて判断することは非常に重要だが、EBPMを進めていただきたいのは確かなので、余りにもエビデンスを求めすぎないことを念頭に置いていただきたい。

②資料2の12ページ目にかかる「誰一人取り残されない」というキーワードを明記する重さを意識していただきたい。最後の一人まで助けるために富山市民全員で平等に負担をすることを同意してもらう必要がある。そうすると税金負担や、共助の仕組みの中での役割を担う負担もある。そこで納得感を持ってもらうためには、合意形成が重要だ。これに対する具体的なアクション案としては二つあるが、一つはオンラインでの議論の場を作り、色々な人に参加していただくことだ。例えば、Decidim（ディシディム、注：合意形成ツール）やアイデアボックスの活用などが考えられる。もう一つは行政でもスケッチラボの取組を事務局の方で色々進めておられると思うが、プラットフォームを作るだけでは足りず、フラットな議論ができるような場をデザインするファシリテーターのスキルが必要。これまで行政職員のスキルとしては位置付けられてなかったと思うが、今後は合意形成のためにどうすれば相手が話しやすくなるかといった、場をデザインするスキルも必要になると考えられるので、人材育成の中にファシリテーションもぜひ入れていただきたい。また、市民側にも人材育成をする必要があり、地域の信頼できる方に取りまとめていただいたプラットフォーム事例のように高校生がファシリテーターとなって進めることも考えられる。

③資料2の18ページ目の「期待される」という表現は再考が必要かと思う。まずは行政でこれをやるという宣言をすることも大事だが、資料が公開されることを考えれば、相手に役割を押し付けるような形の表現になってはいけないと思っている。文面だけを見ると上から目線というか偉そうな印象になってしまうので、そこをきちんと伝えられるような方法に再考していただきたい。具体的な改正案をなかなか提示できないが、これをお願いしたいというスタンスを取ることが重要だと思う。

森本座長）ありがとうございます。オンライン会議の良さを最大限指摘していただき、大変わかりやすかった。次は土肥委員をお願いしたい。

土肥委員) 前回の意見でも言ったが、今できることから少しずつやって市民参加を促す必要があると思う。中間報告の今後のスケジュールを見ても動き出すのは1年先になるように思う。それは私の感覚ではスピードが遅いように感じる。様々な新しいツールを使って全体的に早くスピードを上げていくことが大事だ。コロナのこともあって、1年後、2年後と言っているうちに、人材が流出してしまうことも考えられる。資料1のP.9でも市民ニーズの多くの意見に子どもというキーワードが見られていて、先ほどのスケッチラボの話もあったが、オンラインとオフラインの良さをうまく活用し融合することで、子育て世代をはじめとした多世代を巻き込むことが大事である。

また、便利なまちづくりというキーワードが頻発しているが、便利になった先に富山市に何があるのか、もう少し表現できるといい。例えば便利になったから若者が挑戦しやすくなったとか、便利になったから、孤独化しない街になったとか、選択肢が広がったという内容を示せれば期待感も示せると思う。

森本座長) ありがとうございます。次に富成委員をお願いします。

富成委員) 中間報告については非常によく纏まっていると思う。一方、これは前回も指摘したが、このビジョンはスマートシティで地域課題をITで解決しようという、意識の高い内容だと思っている。その意味では、声を出した人の話は聞くが、声を出さなかったり、情報を発信しなかったりする人の意見をどうまとめていくかが難しい。私どもの活動でも難しいと感じているが、このビジョン検討プロセスの中でも、声を発しない人のデータも集めることができれば、より良くなるという感想を持った。

あと一つは、データを集めようという話はしていたが、今検討されていた内容から考えると、集める前の課題解決プロセスは多分できていて、この課題を表すデータや、どうセンシング(注:センターで測定)すればデータが取れるのかを整理していけば、データの活用方法が不明な部分もスムーズに見えて、さらに課題を構成するデータが見えて、集める内容が明確になるような議論もできるように感じた。

森本座長) ありがとうございます。まちづくりの検討過程においてもサイレントマジョリティーの問題は常に悩ましい問題で、どうやって反映するかは大変重要だと思いますね。下山委員からもご紹介があったDecidim(ディシディム)とか、色々な市民参加方法の多様性は広がってきているため、そういうものを上手に使うのも、いいアイデアだと思います。ここまでにに関して事務局の方で何か発言ありますでしょうか。

事務局) 私たちも教えていただき勉強しながらであり、各委員の指摘にすべて答えられない状態だが、その中でも例えば下山委員から指摘いただいた、誰一人取り残さないというところの難しさをどう実現するのかという点は、実は市役所内部で、この資料を作る時になかなか大きいテーマであり、資料作成段階でも何度も議論になった。市民すべてに対してサービスをくまなく届けられるか、すべての課題を解決できるかというところはなかなか難しいと思っており、だからこそやはりこの自助・共助の重要性が今後高まってきて、その仕組みを何とか

つくっていただけたいと感じている。土肥委員のスピード感のご意見も、ご指摘の通りだと思っており、先ほどの説明の中でもありましたが、来年度に向けて今予算要求をして、スマート関連の内容を盛り込んでいる。さらには、市民の方々にわかりやすいところと言うと、やはり行政サービスというものがイメージしやすいと思っており、市では令和3年度から電子申請サービスなどの拡充を図っている。また、国が動いている自治体クラウドについても全国統一にして、素早くサービスを届けるような仕組みづくりをしていくような取組が進んでいる。このように様々な形で進めることで市民にまず実感していただくことも大事だと考えている。

森本座長) ありがとうございます。残りの委員からもコメントをお願いしたい。東出委員、前田委員、安平委員の順でお願いしたい。

東出委員) 中間報告は非常にわかりやすく纏まっている。特に良いと思ったのはワークショップやワーキンググループで市民参加というか、市民の方々との意見をたくさん聞く場面を設定するフェーズがあったことが評価できるし、そのフェーズがやっぱり本質的なところだと思っている。市民ニーズをきちんと把握し、それを継続的に実施することで、早く成果を出したいという気持ちはすごく理解できる。一方で、例えば業務とか事務手続きとかはスピードを上げてやっていく必要があるが、技術の開発や新しいことをする時には、もっと深掘りをして、富山市全体がやりたい姿に向かうことを強調して出していく必要がある。そのために、例えば、ワークショップ等で、街中に住んでいる人たちが中山間地に出向いて、実際に人の交流をしながら課題を相互に見つめて解決していくことなどが重要だと思う。それがオンラインでできればいいが、実際にその現場に行って、例えば森や畑の状態を見ながら、困りごとを共有しながら解決していくのは、すごく手間のかかることだが、そういう取組もあった方が最終的にはより良いものができると感じた。最後に、富山市で、プラットフォームを作っていられると思うが、弊社は民間事業者として実証実験とか、ローラーワン(注:富山市がセンサーネットワークで採用している無線)という規格を使って、いろいろ実施させていただいているが、一つお願いしたいのは、ローラーワンだけにこだわってしまうと、プラットフォームにいろんなデータを載せたくてもできないような制限がかかってしまう。色々な人が持ってきたデータをきちんとプラットフォーム上で共有できるような規格や仕組みにすれば、より早くいいものができるように思う。

森本座長) ありがとうございます。プラットフォームの構築もそうだが維持管理もかなりの費用がかかるので大きな問題となることから、色々アイデアを出していただき、次の政策に向けた留意事項としていただければと思っております。次に前田委員、お願いします。

前田委員) 中間報告については、ビジョンフォーカスで丁寧な課題抽出がされておりとても良いと思う。次のステップとして、その先の具体的な施策や事業への落とし込みが大事だと思うが、私も行政に入ってみてその部分がとても難しいと感じている。落とし込みにあたり、形だけではなく本質的な議論ができていくか、本

当の課題解決に繋がっているか、必要な関係者を巻き込んでいるかなどに留意しながら縦割りになりがちの中で横串を刺して検討を進めていくことが重要だと感じている。また、行動指標（KPI）の設定も、何となくやった感を防ぐ意味でも重要だと思う。

論点②の課題感について、一つ目のデータの活用やEBPMについては、県でもビックデータ活用プラットフォーム検討委員会の提言を受け、データ利活用に取り組むこととしており、同じ課題認識を持っている。検討委員会からは、ハードとしてのデータ連携基盤の整備とソフトとしてのデータの収集・利活用、そのための産学官連携の枠組みの設立が重要であるとの提言を受けている。継続する仕組みづくりとしては、こうしたハードとソフトの両輪を回していくことが必要だと思っている。二つ目の新技術との接点については、全国の企業が集う、民間の会員制共創施設などを利用するのもいいと感じている。そうしたコミュニティに富山の課題を投げて、様々な企業からソリューション提案を受け、費用対効果を見極めながら実証を進めるのもいいと思う。三つ目の人材育成については、民間企業が行っているオンラインの無料講座などもあるので、そうしたものを活用しながら、デジタルリテラシーの向上や人材育成に取り組んでいくことも考えられる。

森本座長）ありがとうございます。それでは最後に安平委員をお願いします。

安平委員）中間報告についてだが、事前検討プロセスとしては多くの課題や、解決策に関するアイデアが出てきたと思っている。それをコンセプトで、表形式になって抜粋した取り纏めになっている。そこはできるだけ漏れなく盛り込んだ形で、次の施策展開に繋いでいくのがいいと思う。まだ取り纏めの途中ということだが、課題の部分はしっかり全部出したほうが、色々な意見が出てくるのではないかと思う。また課題の部分について、単に「あったらいい」という形式で処理すると、なかなか自分も参加して解決しようという思いにならないという懸念がある。そこで課題については、具体的にこういう課題があって、何とかしなきゃいけないという内容を、熱意を含めて表にさらけ出した方が、市民の方や民間の事業者から賛同や共感を生み、次のアクションやプラットフォームづくりに結びついていくと思う。

それから、課題感のところのEBPMのKPI（行動指標）の件については、先生方からご意見もあったと思うが、自治体の総合計画や重点政策においても、実際のターゲットとしてどういうKPIを目標に進めるとリリースされていると思うので、そういう計画書のデータをオープンデータ化し、活用できるようにして、市民も事業者も課題を数値で認識できるようにしていくのがいいと思う。それから、課題に対する、KPIの部分はアウトプット（注：実施した結果）になりがちのところ、アウトカム（注：実質的な成果）を見据えて進めていくことが、熱意の話に繋がると思うし、オンラインとかアイデアボックスという話題については、例えば、SNSのマーケティングのように、いいねボタンを押した数や、こんな前向きな意見も出ているという紹介が見える化されることによって、ネガティブだけでなくポジティブな意見を多く集め、熱量を

発信していくことで、色々な人が参加してくれるのではと思う。新技術の件については、先ほどもご意見があったように、国の方でも官民連携プラットフォームで自治体の課題やニーズと、民間企業のシーズをビジネスマッチングするような機会が出てきている。そういった場所に参加しながら、新しい技術の取組や、課題解決方法を発見できると思う。デジタル田園都市国家構想の件で、国全体で地方活性化が盛り上がってきており、いろんな情報をキャッチしやすい良いタイミングなので、チャレンジ性を表に出して、民間人材も集めていくように、うまく繋がるといい。

費用対効果の件については、連携のデータ基盤というところで、一般的にはデータを一元化、集中化するようなイメージに思われがちだが、これから必要なのは標準化したデータを連携しながら、組み合わせるような仕掛けになると思う。集中管理しようとする、構築のコストやランニングコストが高くなるので、分散しているデータをうまく活用する方がいい。人材については、先ほど高校生が参加した事例紹介があったが、例えば国の地域経済分析と、富山市が持っている地域課題や、個別のデータ等を組み合わせ、課題解決について中高生にも理解してもらいながら、参画してもらう。そして、シニア世代と親世代と子供世代と一緒に考えて、次の世代につなぐ視点で参画する人を増やすようなきっかけ作りができれば、裾野が広がって良いと思う。

森本座長) ありがとうございます。私の言いたいことは、もう半分以上皆さんが話していただいたと思っております。重複するかもしれないが、私はスマートシティの進行管理は大変だし重要だと思う。先ほど委員の方から、できるだけ早く目に見えるようにしてやっていただきたいという意見も真実だし、10年先から或いは5年先からバックキャストで何をやるべきかを明確にするのも事実だ。或いは10年先のゴールを見据えておいてアジャイル的に変えなきゃいけないのも事実だ。今までの都市計画とは違って、スマートシティはデータを見ながら柔軟に変化していくというのが特徴で、来年のKPIやEBPMの議論につなげていければと思っている。先日内閣府でスマートシティの評価委員会があり、スマートシティをどういうふうに評価するのかという議論をしている。先日の会議で大体纏まったので簡単に話すと、基本的にはインプットがあって、事業があって、アウトプットがある。皆さんからもたくさん指摘いただいたが、国もアウトカムを3段階ぐらいに分けてイメージしている。短期はすぐ数ヶ月で出てくるようなもの、それから年単位、或いは5年ぐらいという分け方で評価するのはどうかと今議論している最中です。3月には取り纏めた結果が出てくるので、それを我々はじっくり観察しながら検討の土台、或いは参考資料にすればいいと思っている。

本日、中川先生（富山市交通政策監）が出席しているので先生からもぜひ一言お話いただければと思っております。

中川交通政策監) 私はコンパクトシティ施策について富山市と検討していた経緯で今回参加させていただいた。コンパクトシティとスマートシティは、何か相反するのではないかという心配も一部ではあるようだが、今日のお話を伺っていると、相

反する部分は全くなくて、お互い相乗効果があるのが見えてきている。とりわけ、コンパクトシティの成果は全市的な内容なので、市民一人一人のメニューについては見えにくい部分があるが、データ基盤がはっきりわかってきて、可視化できるようになってくると、コンパクトシティがどんな効果が上げているのかも伝わりやすくなって相乗効果をもたらすと改めて感じている。また、森本先生のお団子と串と皿の概念は、コンパクトシティとスマートシティをつなげるという意味では、わかりやすい概念だと思った。お団子と串だけを意識せず、それ以外の地域として農業基盤や山林資源を守っていくことを意識したのが、コンパクトシティ政策である。そこにお皿という言葉が加わると、市民にそういう趣旨があることが伝わり、両者を融合することができて、大変面白いなと思って聞かせていただいた。スマートシティが発達することによって、お団子そのものも美味しくなっていく。これらも含めて考えれば、富山市の特徴を出すという意味では、コンパクトシティとスマートシティを、相乗的に効果を出していくのが一番いいと思います。

森本座長) ありがとうございます。お話いただいた、串と団子と皿のお話ですけれども、これは藤井市長がお団子と串以外のところも、きちんとバランスをとってまちづくりを進めたいという大きな方針をお話いただいたので、それを受けてそういう形にしています。市長は今日のお話を聞いて、何かコメントあればご発言いただければと思いますがいかがでしょうか。

藤井市長) 本日もお忙しい中ご出席いただきありがとうございます。コンパクトシティとスマートシティが融合し、市民がどこに住んでいても安全安心で、利便性を感じられる富山市を作り上げていきたいという思いが普遍性の部分だと思っている。現在、私にとって初めての来年度予算編成について協議しているところだ。これまでも様々な実証実験に取り組んできたが、来年も市民のニーズや困りごとの解決につながる実証実験をして、その成果を、どこかの場面でご披露させていただければと考えている。今日いただいたご意見を今後の参考にさせていただきます。

森本座長) ありがとうございます。今回幾つかの論点をいただいたが、その続きとして言い足りなかった内容、また違う話題でも構わない。これからは順番関係ありませんのでどなたでも結構ですがいかがでしょうか。

小泉委員) 座長から話のあったように、国の方でも今アウトカムについて短期から中長期まで考えているということだったが、来年度の検討事項に入っていることで、このロードマップについては半年とか1年、3年など、そういう少し短いスパンで考えていきながら、一方で10年後にはビジョンにある様な都市にして行きたいといったバックキャスト的な発想もうまく生かしたロードマップがあるといいと思う。今日の資料についてということではなくて次年度検討する際にぜひそういう視点を入れていただくといい。それが多分アジャイル的にトライしながらですね、また1年後のやり方とか3年後のやり方を考え直していくことに繋がると思うので、ロードマップが大事ということ、改めて感じた。



それから、この富山市スマートシティ推進ビジョンをなぜ作るのかを考えたときに、その一つはコンパクトシティとうまく調和して、中山間地域も含めた、補完的な役割をスマート化で達成するということが目的だと思う。もう一つ論点があるとすれば、ビジョンを作ること自体がスマート化を進めるプロセスだという捉え方ですね。その観点からすると例えばDecidim（ディシディム）を使ってスマートビジョン自体を作って若い人も巻き込みながら、ICTの普及を促進しながら作成するなどのご意見も出たが、それもビジョンの目的として、まさにビジョンの策定自体がスマート化を進めるプロセスだということを、皆さんと共有できればいいと思いました。

森本座長）ありがとうございます。私もまったく同じ考え方であり、通常都市計画とか都市計画マスタープランのようなフィジカルプランニングは、一度決めたら動かさない、失敗できないような内容だが、スマートシティはそうではなく、むしろサイバー空間における議論が中心なので、もう少しアジャイルに、失敗したらやり直そうという柔軟な考え方が必要だと思う。その他の方からご発言はありますでしょうか。次年度に向けて、幾つか課題も出てきているし、事務局からもKPIや具現化などを含めてこういうことをやりたいというお話もありましたので、それが宿題かなと思う。事務局の方で今日の各委員の先生方、非常に重要なお指摘をさせていただいたと私は認識しているがどうでしょうか。

事務局）本日もたくさんの気づきがあったとっております。特にビジョンを、今回はボトムアップやバックキャストという考え方に基づいて、まずありたい姿からこのスマートシティのビジョンを作ってみようという、私たちにとっても新しい取組方法だったと思っている。また、スピード感と本質的な部分をどう両立させていくか、バックキャストでしっかり本質をとらえながら、素早くやっていく部分の両方を意識しながら、ビジョンを作っていかなければならないことが今日一番の私の気づきだったと思っている。あと、その他のご指摘としてはやはりフォアキャスト（注：現在視点で課題に取り組むこと）でやると、すぐに何課が所管で何をやるかという話になって形が見えやすい一方で、バックキャスト（注：将来視点で課題に取り組むこと）すると、どうしてもありたい姿はわかったけれども、これと実際のスマートシティの活動がどう繋がっていくのかが見えづらいというご意見も、事前に協議している中でありました。やはりこのビジョンは、市民の皆さんに共感いただかなければならない。もしくは、スマートシティがこれから進むことを理解していただく必要がある。そういう意味では、きちんと動きを示していかなければならないと強く感じた。いずれにしても来年度は、今年度の中間報告をもとに、さらにワークショップなどを来年度に予定しており、その機会でも色々なご意見いただきながら最終的な案にしていきたいと考えている。ぜひ皆様、今後ともご指導ご協力をいただければと思っております。

下山委員）最後に、論点2の2つ目に新技術との接点について書かれていたので、ぜひお勧めしたいのが、まず職員の皆さんが新しいツールとか、あとは、新しい形での情報交換にどんどん慣れていただく必要があると思う。一つおすすめとしては

デジタル庁の方でやっている共創プラットフォームという、スラックというツールを使ったものがある。これは、国や自治体職員の方々だけ参加できる形になっており、今 2700 人ぐらい参加されている。デジタルに関連する部署の方にはぜひご参加いただくと良いと思う。結構皆さんもフラットにもいろいろ議論されており、本当にもう町村から国の機関からいろいろな方が参加されている。さっき検索したら、富山市からも 3 名ほどおられた。無料で使えるものも沢山あるので、是非こうしたツールも使っていただきたくご紹介する。ツールをご紹介したのも、単にスマートシティのプロジェクトに使うだけではなく、デジタル人材育成とか、あとはDXもまさにそうだが、全庁的に進めていただかないといけない話だと思う。今回資料を拝見していて、すごく広範囲にまとめていただいているが、おそらく単独プロジェクトではなく、全庁的に取り組んでいく必要がある。そのため、市長はじめ、様々な部署の幹部の皆さんにもご参加いただいたという認識でいる。この有識者会議から上がってきた議論については、富山市全体での課題として認識していただき、特に人材育成や、新しい技術とか新しい知恵に触れる機会をどんどん作っていただきたい。それに応じて、例えば既存のセキュリティレベルの話も、本当に全域制限しておく必要があるのかとか、色々な議論が出てくると思う。既存の規制改革なども含めて、全庁的な取組としてぜひ検討いただきたい。

森本座長) ありがとうございます。貴重な情報提供ありがとうございました。最後に一言、今回オンラインという形になりまして皆さんと議論をさせていただきました。委員の方からは、今後も同じで良いのではというご意見もございますが、私自身は東京にいますので、富山に行って皆さんの顔を見たいなという気持ちもありますので、また次回、コロナが落ち着いたら、そちらの方に参上したいなと思っております。短い時間でありましたが、活発なご議論をどうもありがとうございました。以上で、私の進行を事務局にお返ししたいと思います。

事務局 ) 委員の皆様、ありがとうございました。本日の議事録につきましては後日送付させていただきますので、また改めてご確認いただきますようよろしくお願いいたします。なお、来年度に予定しております第 3 回会議につきましても、改めて日程調整を行いたいと考えております。委員の皆様には引き続きご指導くださいますよう、よろしくお願いいたします。それではこれをもちまして第 2 回富山市スマートシティ推進ビジョン検討委員会を閉会いたします。本日はご多忙のところお集まりいただきましてありがとうございました。